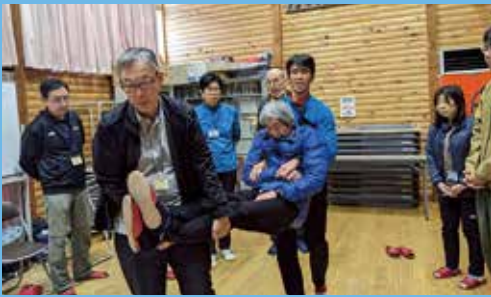


登山月報

JMSCA 登山月報 第681号 令和7年12月15日発行



『大山頂上稜線から剣ヶ峰を見る』



No.681

2025 IFSC Nations Grand Finale & Para Climbing Master 報告	2
第4回リードフューチャーカップ西条(LFC2025)開催報告	3
JMSCA 国際アルパインクライミング委員会	5
第3回アルパインクライミング懇談会2025 報告	
令和7年度 山での応急手当講習会(秦野)	7
令和7年度 安全登山指導者研修会「西部地区」報告	8
アジア山岳連盟(UAAA)モンゴル総会報告	9
Enjoy Climbing	10
岩手県山岳・スポーツクライミング協会 自然保護委員会SDGsな活動 ..	11
JMSCA、寄贈図書、表紙のことば	11

2025 IFSC Nations Grand Finale & Para Climbing Master 報告

安井博志



世界初となる国別対抗戦「IFSC Nations Grand Finale」が開催され、日本、米国、カナダ、オーストラリア、イスラエル、韓国の6カ国が出場した。本大会ではボルダーとリードの2種目で国別の強さを競い、日本チームも新形式での国際大会に挑戦した。同時開催された「パラクライミングマスター」には日本選手を中心に15名が参加し、国際舞台での経験を積む重要な機会となった。

■新ルール（ボルダー）について

今大会で採用されたボルダーの競技形式は、国別チーム戦のために新たに設計された特別ルールであった。1ラウンドには5つの課題が設定され、男子課題2つ、女子課題2つ、そして男女混合課題1つが含まれる構成である。各課題には国ごとに2名が挑むこととなり、混合課題のみ男女1名ずつが登る形式であった。また、1課題の最大得点は、挑戦する2名がそろって1アテンプト目で完登した場合の50ポイントとされ、これにより1ラウンドの最大合計得点は250ポイントとなる。さらに、チーム内での情報共有が認められており、選手同士の連携だけでなく、どの課題に誰を送り出すかというコーチの判断が勝敗に大きく影響する非常に戦略的なルールとなっていた。

■リード種目

リード決勝には日本を含む4カ国が進出し、情報共有が許可される特別ルールのもと、各国が2巡ず

つ登る形式で競技が行われた。日本チームは野中生萌が先陣を務め、男子選手を上回る区間を含めて安定した登りを披露し、チームに勢いをもたらした。続く吉田智音は今季の安定感を示す内容で高いポイントを獲得し、上位国との競り合いに大きく貢献した。谷井菜月は予選の悔しさを糧に積極的なクライミングを見せ、中盤以降でしっかりと高度を伸ばした。最終走者となった安楽宙斗はプレッシャーのかかる状況下で見事に完登し、日本チームの総得点を押し上げた。

最終的に日本は161.5ポイントを記録し、韓国にわずか6ポイント及ばず2位という結果であったが、4名全員が持ち味を発揮し、今シーズンの成長とチームとしてのまとまりを示す内容となった。

■ボルダー種目

予選を1位で通過した日本は、決勝においても男女4名がそれぞれの強みを最大限に発揮し、圧倒的な総合力で初代王者の座を勝ち取った。決勝は男子2課題、女子2課題、そして男女混合1課題の計5課題で実施され、日本チームは各場面で高い対応力を示した。

第1課題では、安楽宙斗、天笠颯太、野中生萌、中村真緒の4名全員が1アテンプトで完登し、満点となる100ポイントを獲得した。続く第2課題でも、野中と中村が続けてファーストライで完登し、チームの得点を確実に積み上げた。男子2名は難度の高いムー



ブに苦戦したものの、チーム全体としては依然として首位を維持し、盤石の展開となった。最後の混合課題では、男女の選手がそれぞれ完登し、日本チームの層の厚さと安定感を世界に示す形で締めくくった。

最終得点は 219.6 ポイントに達し、2 位以下に大差をつけての優勝となった。新形式大会のボルダー種目において、日本チームは総合力と戦略性の高さを遺憾なく発揮したと言える。

■総 評

今回の Nations Grand Finale は、従来とは異なる形式による国別対抗戦として注目を集める中、日本チームはリード・ボルダーの両種目で高い競技力を示し、特にボルダー種目では初代王者として大きな成果を挙げた。



選手層の厚さ、チームワーク、そして新ルールへの柔軟な適応力が、今回の好成績を支えた要因であるといえる。

また、大会期間中には IFSC から「このようなチーム戦形式を将来的にオリンピック種目として導入していきたい」という発言もあり、個人競技として発展してきたスポーツクライミングに新たな可能性が示された。個々のパフォーマンスだけでなく、戦略や連携を伴うチーム戦の魅力が加わることで、競技全体の発展につながる可能性が大いに感じられた大会であった。

今後も今回得られた経験を強化・育成に還元し、次シーズンに向けて準備を進めていきたい。

第4回リードフューチャーカップ西条(LFC2025) 開催報告



2025年11月15日(土)および16日(日)の2日間にわたり、愛媛県西条市「石鎚クライミングパーク SAIJO」にて、第4回リードフューチャーカップ西条(LFC2025)を開催した。

本大会は、9月に開催された第5回ボルダーフューチャーカップ銚田(BFC2025)に続き、「大会経験を積むと共に、競技者としての倫理・健康面の認識・知識の向上を図る」を目的に掲げ、単に競い順位を決めるということにとどまらず、若年層への普及・教育の意味を込めて開催するもの。公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会(JMSCA)が主催し、西条市、西条市スポーツクライミングとの共催、愛媛県山岳・スポーツクライミング連盟による主管のもとで実施された。



■開催概要

第4回リードフューチャーカップ西条(LFC2025)

期 日 2025年11月15日(土)～16日(日)

参加選手数 151名

(U-15男子 46名、U-15女子 53名、
U-13男子 27名、U-13女子 25名)

会 場 石鎚クライミングパーク SAIJO

来 場 者 数 11月15日 約230名、11月16日 約220名

フューチャーカップは、ユース日本選手権へと続く年代層の大会として、これまでユースC・ユースDのカテゴリーで開催してきた。今シーズンは、国際スポーツクライミング連盟(IFSC)によるカテゴリー編成の変更を受け、本大会もU-15およびU-13の2カテゴリーで実施することとした。

また本大会は、ボルダーフューチャーカップに引き続き、「大会経験を積むとともに、競技者としての倫理観や健康面に関する認識・知識を高める」ことを主たる目的としている。参加者にとって長い競技人生の第一歩となるよう、順位を争う場にとどめず、親子研修

会の実施など教育的側面を重視しながら開催した。

■競 技 (競技結果下表参照)

競技は例年通り予選のみとし、各選手が2ルートを登る形で競われた。男女別にU-15/U-13で共通のルートにより実施した。

■大会運営

大会は、昨年に引き続き愛媛県山岳・スポーツクライミング連盟のもと運営された。同県では過去に何度も開催された全国規模の大会のノウハウが蓄積されており、とても安定した大会運営であったと感じる。改めてボランティアの皆様にお礼申し上げたい。

本大会の開催にあたり尽力をいただいた、全ての関係者の皆様にお礼申し上げます。

(実行委員長 百瀬恭平)



親子研修会の様子



競技の様子



男子ルート



大会運営スタッフ



競技の様子



女子ルート

U-15	男子	1 位	長尾 一樹	山口県山岳・スポーツクライミング連盟
		2 位	上田 大志	山口県山岳・スポーツクライミング連盟
		3 位	伊藤 湊	三重県山岳・スポーツクライミング連盟
	女子	1 位	木村 夏渚	横浜隼人中学校
		2 位	齋藤真里依	栃木県山岳・スポーツクライミング連盟
		3 位	廣瀬 堇	東京都山岳連盟
U-13	男子	1 位	濱松祥太郎	三重県山岳・スポーツクライミング連盟
		2 位	安本 椰生	埼玉県山岳・スポーツクライミング協会
		3 位	孔 誉钦	無所属
	女子	1 位	橋本 暖	群馬県山岳・スポーツクライミング連盟
		2 位	小川さくら	埼玉県山岳・スポーツクライミング協会
		3 位	海野 奈花	大阪府山岳連盟

JMSCA 国際アルパインクライミング委員会 第3回アルパインクライミング懇談会2025報告

2025年11月6日（木）19：00～21：00
於 すみだ産業会館（東京都墨田区）

「エッ」と目を疑ってしまったのは私だけだったのか!?

今回のポスター並びに懇談会資料の表紙もほぼ同様だが、こともあろうに表紙の《放浪者の軌跡》を「浮浪者…」と誤って読んでしまったのだ。

メインスピカーの岩崎洋（いわざきひろし）氏のターバンの出来損ないの様なものを頭に巻いている如何にも怪しい写真がそうさせているのかもしれない。でも「安心して下さい」ゲスト二人の写真はヒマラヤ登山等のレジェンドである尾形好雄（おがたよしお）氏と山野井泰史（やまのいやすし）氏です。この二人は怪しくない!

改めて見ると「浮浪者」である訳はないよね「放浪者」なのでありました。しかしアルパインクライミング懇談会（以下AC懇談会）に、この題名は何とも不思議ではありませんか?…変な題名でもあってか会場参加者の上限80名を申込数日で超えてしまった上、オンラインの申込みも250名オーバーとなってしまいました。

さて今回の第3回AC懇談会の内容はいかに…。

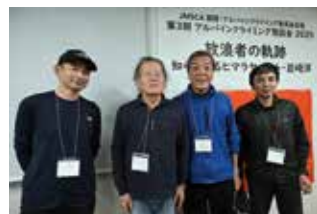
まず当協会の町田幸男会長の挨拶があり、メイン講師である岩崎氏の話が静かに始まった。進行役は当委員会常任委員の馬目弘仁（まのめひろよし）が務め、所々で話をわかり易くしてくれた。

知られざるヒマラヤニスト【岩崎洋／山と旅】

まずは述べておきます。知られざる…と言うより、岩崎氏は知る人ぞ知るクライマーで、例えば国内ヒマラヤンデータ集計では右に出る者が居ない山森欣一氏の日本人7千m峰以上登頂者調べ（2007年12月31日が最後の調査）によるとトータル獲得標高は14座16回の登頂で118,320mと日本人として第3位となっているのです。

ちなみに旅は中学高校時代から宿にも泊まらず駅等で自炊をしていたという筋金入りの放浪旅人であったとか、大学に入りアフガニスタンからサハラ砂漠へ旅をしたかったもののソ連・アフガン戦争によって断念。ひよんな事で山岳部に顔を出したのが運の尽きで年間2百日も山に入り浸るようになった。1984年秋には先輩からインドのマンモストンカンリ（7516m）に誘われて登頂。その時の隊長尾形氏とはそれ以来の付き合いとなった。山の後の旅は定番、インド・ネパール・パキスタンを巡り帰国したのは1年以上後となる。帰国し大学生生活は7年目に入るも、授業料を払うんだったら飛行機代になるなど退学をしてしまいます。

1986年には中国、西藏のカルジャン峰（7216m）に初登頂、難しい山だったとの事だが登山隊とは北京で別れラオ



ス・ビルマ国境付近の旅後西藏、拉薩に向かう。途上外国人立ち入り禁止地区通過の為少数民族のふりをする、教育を受けてない故に中国語もしゃべれない感じでやり過ごし、宿へ泊るには身分証が必要であったが東京都山岳連盟の会員証が同サイズだったので“東京”の文字!?で相手を信用させたとかで中々の役者でもあったようだ。

87年1月に拉薩からネパールへ。以後ネパールとインドを行き来して過ごす。88年インドからパキスタンへ。遅い秋にフンジェラブ峠を越えてカシュガルへ抜ける。其処で年を越し、その後日本経由香港、タイ、ネパール～パキスタン、90年の正月はイスラマバード。突然の友人からの手紙でパタゴニアに誘われ冬のイスラマから真夏のブエノスへ飛びアルゼンチンのフィッロイ（3441m）に登り、更には無許可でアコンカグア峰登頂。以後ボリビアの6千m峰に登頂後、今度は南米でのラテン生活へ、90～91年はペルークスコで年越し91～92年はチリで年越し、持ち金が20ドルしか無くなり、チリで数か月働き北半球へ。ロスアンゼルスで働き帰国する積りだったが、安く成田行きのチケットが手に入ったので、其の儘帰国した。

やっと1993年のインドヒマラヤ登山になるところで今回の話は時間切れ、プロフィールではこれからバシバシと登山が続くのだが話を聞けず残念!最後に馬目氏より質問「旅と山はイコールですか?」に対し「好奇心を満たすためのもので楽しめれば何でもやってみる。それはつらくても幸せになれる事ではないか」との答えでした…う～ん答えと云うより皆に語り掛けているかのようでした。

続いては、

【山野井泰史／遠征先での生活と旅、山の選び方】

海外登山は今まで40～50回は行っている。20回はヒマラヤ等の高所、残り半分は低い山等での岩登り。高校卒業後の1984年からの3年間はヨセミテとコロラドでクライミングをしたものの、ヨセミテでは半年でお金が尽きロスアンゼルスで皿洗いをして3百ドルをためて再び戻って来てエルキャピタンを登った。一人で渡米したのは友人・家族の居ない所で暮らし自分を試したかったからだ。そして米国より英国経由フランスに入りドリュウ西壁のフレンチダイレクトを単独初登。ここまでは昔のクライマーなら「すげえなぁ」と知られているところだが、その後ヒッチハイクしドロミテへ。金銭的な事もあるがヒッチハイクは楽しいとの話であるも更にヒッチハイクでアテネへ格安航空券を求めて向かうが、ここでドロボーに全てのお金を取られてしまう。アテネのホテルでアルバイト後に日



本へ戻る。海外はヤバイと思うより自分の生活力が高まったと満足するとはやはり普通の人ではなかったようだ。

その後バフィン島、ダグ・スコットの著書で巨大な壁と書いてあったのでトール西壁を登りに出かけ単独初登。そしてニューヨークに渡り西海岸までバスを乗り継ぎ7、8日間かけ向かった。この時は避暑地から観光地までの楽しい旅だったと言う。

翌年に出かけたのは、やはりダグ・スコットの本に紹介された前人未踏の冬季“パタゴニア・フィッロイ”。アプローチも不明でスペイン語もわからないが一人で向かった。初年度は敗退し転身した5千m峰で高山病、アコンカグア峰も入山事務所で敗退と続き、温かい所へと北進、ヒッチハイクでブラジルへ。日本人恋しさにサンパウロに行くも目的のない連中とは個人的に合わずじまいでリオデジャネイロにて現地クライマーと岩登りをする。ここからフライトしてヨセミテからコロラドとクライミング三昧。

自分のモチベーションのまま、冬からの5ヶ月間を大いに楽しんだ!との事。本来ならまだまだ続く話だが、最後に初めての8千m峰ブロードピーク(8054m)、高所はどうかと勉強した山。話は現地ポーターの写真と共に…ポーターら現地の人と触れ合ってこそ他文化を知る事が出来、旅が楽しい。今の人はエージェン트まかせで行って帰るだけなんてケースも多く、それでは一寸さみしい気がする。最後の最後に「ボクも岩崎さん程ではないが山を楽しんでいる」と締めくくった。

あのソロクライミングマシンである氏がこんなにも旅好き人好きであったとは…再確認をさせてもらった一時であった。

三人目の話はサイボーグとも称される超人

【尾形好雄／スケールの大きな山登りとそのクライマー像】

前置きとして1974年ネパール、ツクチェピーク峰(6920m)のヒマラヤデビューから8千m峰5座を含め6千m以上の山15座に登頂している、そのほとんどが隊長又は副隊長である。1981年のヤルン・カン(8505m)のカンチェンジュンガ縦走計画が唯一出来上がったレールに乗っただけ、いかにご本人が主体的行動でヒマラヤ登山と対峙してきたかを物語っている。

前記した通りツクチェピーク峰が山岳会での初海外登山、仲間3人と共に20才代前半であった。そして同山岳会



でのヒマールチュリへとつながって行く。ヤルン・カンの後に同じヒマラヤ協会隊、84年マモストン・カンリ登山隊隊長として岩崎洋氏を隊員で迎える事となる。なお同山の情報は写真1枚もなく、手探り状態で向かう事となった。

以後ブータンのガンケール・プンスム峰(7594m)でもあって写真1枚という、情報がほとんどない山への挑戦が続く。

初期の小さな町の山岳会遠征からヒマラヤ協会や群馬県山岳連盟のような大きな山岳団体を登頂へと導いて行く原動力となっていた、才能あるも努力の人なのである。

岩崎氏は尾形氏と出会っていなければ、スケールの大きな旅の経験をし得なかったかも知れない。

最後のセッションとして三氏と馬目氏で…

【現在の日本のアルパインクライミングをどう思うか?】

まず馬目氏より…ごく近年の優れたアルパインクライミングの実践を紹介。いずれも高難度だが、全て6千m峰について聞くと

岩崎氏「いずれも良い計画が多く、その上登ってくる。家族がいるからきちんと帰ってくるので、それはそれで素晴らしい。」

山野井氏「1980年代にアメリカ隊はすでに6千m台の高難度ルートを小人数で登攀していた事を考えると現状は少々寂しい。」

尾形氏「社会情勢がある。仕事がある者は登山期間三週間とか限られてしまう。昔は会社を辞めて行ったから岩崎君ではないがついでの別の山の偵察やら旅も出来た。また若い人のクライミング技術の進歩でピークでなくルートのライン取りにこだわって来ているのではと思うとも」

馬目氏…これから20代の人はGⅢなど大きな山に向かってくれる気がする。

ところで電子機器のGPSや天気予報、ドローン等の利用については?

三氏共に心良く思っていないのが凡人クライマーには不思議だったかも知れないが、山を愛し旅も大好き、情報のない山が面白い等、山に対して全て楽しく感動出来ればよし!という方向だった気がする。

まとめにはならないだろうが、今回三人の大先生のお話はとても2時間では済むものではなかった。機会があれば一日でも二日間でも再度計画をしたいと思った。

最終的な参加者は会場73名、講師・役員等19名、オンライン参加者最高時133名でした。

(国際アルパインクライミング委員会・常任委員 笹原芳樹)

令和7年度 山での応急手当講習会（秦野）

登山医科学委員会主催 令和7年11月2日～3日

「山での応急手当講習会」を秦野の神奈川県立山岳スポーツセンターで開催しました。この講習会は今年は神戸と秦野（神奈川県）で1回ずつ開催することとなりました。神戸では既に6月28日～29日に開催しました。今回は秦野で開催した講習会について報告します。

参加者は受講者11名（男性8名、女性3名）、スタッフ8名の計19名でした。内容は座学を3時間、実習は8時間で各種の応急手当方法とシナリオトレーニングを行いました。昨年の講習内容にさらに、テーピング技術やレスキューシート防寒技術を追加し、実習時間は昨年より1時間増やしました。

講習会後のアンケート調査（11名中9名回答）では全員から講習内容に「満足」の評価を頂きました。講習会への要望として、それぞれの手技の実技時間が短いなどの意見がありましたので来年度の講習会では、これらの要望を参考にしてさらに充実した内容にしたいと考えています。（登山医科学委員会 中島隆之）

＊

***** 佐藤 慎吾（秋田県横手市）

「山での応急手当講習会」に初めて参加させていただきました。私自身、これまで負傷者に遭遇する機会はありませんでした。いつ何が起こるかわからない山中で、万が一の場面に遭遇した際に対応できる知識を習得したいと思い参加を決意。

初日は、机上講習。主に負傷者への対応法やテーピング技術。講師の方々はその道のエキスパートで、傷病者への対応については、ケースバイケースで対応する術をご教授いただきました。「傷病者は不安なので、その不安を取り除くために常に声掛けを行う事が重要」、「所持品を工夫することで応急手当が可能」、「初期手当後、ドクターヘリなのか、そのまま安全な場所まで移動させるのか判断」。気象条件により状況は刻々と変化するので、常に状況を踏まえて早急に行動しなければいけない。わかったつもりでいても実践できなければ意味がない、重要さを再認識できた。

翌日は、班ごとに分かれて模擬訓練を実施。模擬訓練では、前日に講師だった方が負傷者役となり、色々な症状への処置を実施。訓練中、負傷者の「痛い・痛い」という声に焦ってしまい、頭の中が真っ白になった時には「まだまだだなあ」と自分の未熟さを痛感。

今回の講習では、机上講習と模擬訓練の実施により、多くの事を学ばせていただきました（詳しく知りたい方は、来年度の「山での応急手当講習会」を受講してみてください）。



時間が経つと忘れてしまうことや、実際にその場面に遭遇したときに慌ててしまうことは安易に予想できます。

- 1) 安全を確保し、自分やパーティーが2次被害にならないようにリスクを考えての判断と行動。
- 2) レスキューのプロではないので、無理せず安全を心掛ける。

この二つを常に意識しながら、教えていただいたことを忘れないように反復練習を続けます。

講師の方々、関係者の皆様、このような講習会を企画していただきありがとうございました。

***** 榎林 佑美（静岡県牧之原市）

自分が山での活動中に足を骨折し、同行者に手当、救助してもらった反省から、今回の講習に参加させていただきました。

机上講習は、怪我や病気などの症状と重症度を照らし合わせて学び、危急時の処置や対応を具体的に把握することができました。講師の先生方の豊富な知識や経験に裏付けされた講義はとても興味深く、オープンに質問ができる雰囲気、学びが深まりました。

実習は、知識を実践に落とし込む難しさや他の人に触れたり処置したりすることへの不慣れから、最初は素早く適切な処置や対応をすることは難しかったです。しかし、先生方からアドバイスをいただき何度も練習を重ねることで、徐々にスムーズに行動することができるようになりました。今回の講習で、予防や、危急時に状況や傷病者さんの症状を観察・把握する方法、素早く適切な処置や対応について学ぶことができました。そして実際に医療や救助に係っている先生方の研究し続ける姿勢や傷病者さんへの誠意のある対応を見て、安心・安全な山の活動への知識・技能を身に付けておくことの大切さを改めて考えることができました。

これからも、日々の山の活動において、道具や装備の準

備、身体作り等の予防をするだけでなく、「この状況ではこのようなことが起こるかもしれない」という防災意識や

危機管理の意識を持って臨みたいと思います。ありがとうございました。

令和7年度 安全登山指導者研修会「西部地区」報告

令和7年11月7日（金）～9日（日）

宮崎県西臼杵郡日之影町の鉾岳（1,277 m）および鹿川地区交流センター「つりがね」を舞台に11県から34名の受講生を迎えて研修会が開催されました。主催の国立登山研修所からは米山所長と杓掛専門職、北村講師、河合講師、JMSCAからは廣川副会長と石田理事が来宮し、県内スタッフ14名で研修会を運営しました。

【1日目】

講義Ⅰ：リスクマネジメントとPDCAサイクルで安全登山

登山指導者としてどのような知識や技術を身に付け、どう伝えるべきかという視点で進められ、グループ討議などを交えて理解を深めました。

講義Ⅱ：読図とナビゲーション（初級・中級）

地形図を「見る」から「読む」に意識を変えると地形を楽しくイメージでき、逆に根拠なく進むと道迷い遭難につながるなどの説明があり、受講者は地図を読むことの重要性を確認しました。

実技研修Ⅰ：コンパス1・2・3

コンパスを使って現在地から三角形を描くように進んでまた現在地に戻って来るという実技を行いました。基本動作を確認する方法は分かりやすく今後の指導で使えるなどの声が聞かれました。

講義Ⅲ：道迷いの心理

道迷いは思い込みにより起こしやすいとの説明があり、受講者からは自身の実体験に照らして、心理状態は正にこのとおりだったなどの意見が聞かれました。

研究討議Ⅰ：明日のプランニング

翌日の実践（鉾岳登山）に向けて班ごとにプランニングを行いました。

【2日目】

実技研修Ⅱ：リスクマネジメントとナビゲーションの実践



参加者全員の記念写真

標高差約 550 メートル、片道約 2.9 キロメートルの鉾岳登山道を使って実践研修を行いました。班ごとに、前日に念入りにプランニングをしたポイントを確認することで研修にふさわしい登山ができました。

実技研修Ⅲ：登山時の応急救護処置

三角巾を使った基本的な応急救護の実技研修を行いました。

【3日目】

研究討議Ⅲ：安全登山のための指導計画

題材の地図を基にして、班ごとに「リスクポイント→リスク評価→原因→対策」のグループワークを行って発表しました。今後、指導者として計画を立てる際のリスクマネジメントにとっても役に立つ講義であったなどの感想が聞かれました。

研修会を運営して

初日と2日目は天候に恵まれ、しかも紅葉が始まった絶好のタイミングで受講者をはじめ主催者や講師の皆様をお迎えすることができたことは嬉しいことでした。3日間の研修会では登山客を増やすのではなく、自立した登山者を育てることが安全登山の基本であることを強く再認識しました。

北村、河合両先生をはじめ研修実践や運営に携わり、ご協力いただいた全てみなさまに心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

（宮崎県山岳・スポーツクライミング連盟 副会長 下村真一）



アジア山岳連盟 (UAAA) モンゴル総会報告

6月20日(金)アジア山岳連盟の2025年度総会がモンゴルで開催されました。通例UAAA総会は秋の開催ですが、モンゴルでは初秋には雪が降り気温もかなり低くなるため夏の開催となりました。

開催地は大都会の首都ウランバートルから車で二時間ほどはなれた、草原地帯にゲルが点在するテレルジ国立公園ジウルチンリゾートです。

UAAAの日本の加盟団体は日本山岳スポーツ・ツクライミング協会(JIMSCA)と日本勤労者山岳連盟(JWAF)の二団体ですが、JIMSCAは日程が総会と重なってしまったため、顧問の神崎忠男と本木總子、通訳の西川あゆみが参加しました。参加者はモンゴル二団体、インド、ネパール、中国、台湾二団体、韓国二団体から約30人と例年より少なかったようですが、日本からは勤労者山岳連盟からも代表二名が参加しました。

会議は午前9時開始。

冒頭、今年亡くなった平出、中島両登山家をはじめUAAAの仲間を偲んで黙とうをささげました。会議はUAAA代表国韓国のクリスティン、ペイ事務局長が議長を務め手際よく進められました。

UAAAの李会長、モンゴル山岳協会(MCMAC)会長のあいさつにつづいて参加各団体の活動報告が行われました。

①中華台北山岳協会(CTMA)、②中華台北健行登山会(CTAA)、③韓国登山会(CAC)、④韓国山岳協会(KAF)、⑤ネパール(NMA)、⑥モンゴル(MCMAC)、⑦日本(JIMSCA)、⑧日本(JWAF)、⑨インド(IMF)、⑩中国(cac)の順番で内容はいずれも、登山、クライミングのほかハイキング、ウォーキング、スキーなどで一般の方に自然に親しみ、山を楽しんでもらうようにしている。の他

- ・登山道や山小屋の整備
- ・ユースプログラム
- ・クライミングコンペ
- ・環境保全、自然保護
- ・山岳救助訓練

などに、それぞれの地域の特性を生かして積極的に取



り組んでいる様子が映像を交えて報告され、質疑応答が繰り返されました。

JIMSCAは、①動画を使って、富士山の外国人登山者のマナー、モラルの現状と安全問題の啓発を提起。各国の参加者は熱心に動画を見ていました。

②田部井淳子さんのエベレスト登頂50周年を記念して、女性登山の普及振興の年にしたいとの提案。

③加盟団体ではないが日本山岳会は12月に120周年記念祝賀会を開催、是非ご参加を！と神崎(通訳西川)が発言しました。

二回のコーヒープレイクと昼食を挟んで熱心に会議は進められました。発言の所々に「ミスターカンザキ」の声が聞かれ、存在感が感じられました。

会議の終盤に、李会長から「ジュンコタベイアワードアジア女性クライマー」の新設が提案されました。「田部井淳子さんの功績を記念して、三年に一度優れた女性登山家を表彰し1000ドルの賞金を渡す、賞金の半額は李会長が負担する」との案が満場一致で承認されました。

さっそく第一回の候補者として韓国から「kim young-mix」さんが推薦されました。短期間にセブンサミット登頂、南極点もソロで到達、トレイルランニングにも励んでいる若い女性登山家との説明に、これも満場一致で決定。さっそくzoomで本人に伝えると大喜びの声と、満面の笑顔が画面いっぱいには映されました。

・次に台湾の参加者から日本の中村保氏をチベット探求の業績からUAAAの名誉会員に推薦したいとの提案がありました。この件も満場一致で承認され、中村保さん(日本山岳会員)はUAAA名誉会員第一号となりました。後日、神崎顧問がご自宅を訪れ報告したところ車いすで表れた中村さんは、名誉なことで大変嬉しいと喜ばれたとのことです。

・最後に次回2026年度のUAAA総会は中国の重慶、2027年度は韓国(KAF)との報告があり無事総会は終了しました。

総会終了後三日間のエクスカージョンでは、モンゴル登山協会のご厚意により大草原の乗馬体験、山寺訪問、博物館、民族劇場見学などチングスハンの色濃いモンゴルの自然、歴史伝統、遊牧民の生活などに触れる機会をもつことができました。感謝！ (顧問 本木總子)

Enjoy Climbing!

Enjoy Alpine Climbing! 連載⑨ — アルパインクライマーとしての成長 —

鈴木 雄大

既に夜7時を過ぎて真っ暗だったが、雪は締まって上からの落下物もない時間だったので、そのまま登りの逆で3人同時クライムダウンを繰り返す。所々、ヒマラヤ特有のブラックアイスも出てきたが、スクリュウやカムを決めながら、落ち着いて処理し、10時にリシト氷河に降り立った。とても長く、集中力が求められる下降だった。ABCまであと一息、1時間しないくらいでトボトボと氷河を降り、4日ぶりにハーネスを脱いだ。夜11時過ぎだった。なんとも言えない素晴らしい充実感に包まれ、翌朝10時まで久しぶりの濃い空気の中ゆっくり眠った。この標高にして、高難度かつ上質なミックスクライミングから積み木のようにボロい壁やベルグラ。素手でのロッククライミング、そして登るに従ってスティープになっていくヘッドウォール。シビアなエイドクライミングに加え、最後はいつも通り、拷問のブルーアイスセクション。スノーハンモックを利用しての2ピバークや、山頂での悲惨なピバークも印象的だった。アルパインクライミングとは如何にオールラウンドで、自由で、素晴らしい登り方なのかと再認識させられた登攀となった。何より、このパキスタン辺境にある、美しくワイルドな未踏壁を山頂までダイレクトに、一筆書きというシンプルかつ美しく、満足いくスタイルで登れた事が嬉しい。ベースから壁を見上げ、特に最上部はまるで想像がつかなかったが、行ってみたらクラックや氷、そして最終的には1cm以下のクラックに奇跡的にギアを決めて這い上がったこと、これら全てが繋がったことが本当に信じられない。僕にとってこの未知の登攀はまさしく大冒険であった。この原稿で、クライミンググレードをいくつか記載しているが、それはあくまで、写真では伝わらないリアルな状況説明を補うため、後からつけたものだ。その数字は僕にとってあまり重要ではなく、全てをワンプッシュで、山頂まで攻撃的に繋がれたことに非常に満足している。

大岩壁に蜘蛛の糸のように張り巡らされた氷と、ベースキャンプに無数にいた大蜘蛛から、Spider's Threadとルートを名付けた。

9月25日、ABCからBCへと戻り、1日挟んで9月27日、



「壁全景」

久しぶりに6人のポーターたちと再会し、登頂の喜びを分かち合った。登山者が来ないこのエリアで、彼らもポーターをするのは実は初めてのようなだったが、凄く喜んでくれたのは嬉しかった。麓の一軒家に帰り、久しぶりの手料理で祝福してくれたのが、栄養不足の僕らの体に染み渡った。

2024年も、ペルーとパキスタンでの登攀が幸運なことに上手くいき、僕にとって大きな1年となった。どちらの登攀も、行けるか行けないか分からない状況が連続し、未踏のアルパインクライミングにおいて重要なことを改めて学ばされ、アルピニストとして成長させてくれる経験となった。何を学んだか？それは多すぎてここには全て書ききれないが、3つほど挙げてみると以下の通りだろう。

1つに、「ルートが繋がっていると信じて登ること」キタラフの迷路のようなマッシュルームのリッジや、ツイ2の最後の6400m地点での際どい極小ギアでのエイドセクションなど、下から見ても分からない核心部に突入する時、躊躇していたら勢よく突破できなかっただろう。一歩進んでしまったら、そこにコミットするしかない。手掛かりやクラックを必死で探し、自分を信じてルートをこじ開けるのみ！

2つ目に、1と少し矛盾するようだが、「現実的であること」これは常に冷静に、最悪の状況をイメージしながら登ること。突っ込む時は躊躇してはいけないが、自分のコントロール下におけないリスクの許容度は、現実的に慎重に判断した方が良い。今回、ペルーで15mの大墜落をした際は運が良く、怪我をしなかったが、もう少し慎重なライン取りをすべきだった。

そして最後に、「良い未踏ラインを見つけ、登りに行く行動力」これが一番難しい。幸運にも僕は、ネパールのラジョダダを含め、これまで5本の6000m峰での初登攀を経験できたが、日本のクライマーとして、そのエリアのローカルでもなければ、その壁や山のコンディションに詳しいわけでもない。とにかく、現代のインターネットやGoogle Earthなどを駆使してターゲットの候補を見つけ、未踏ルートについて想像を膨らませるしかない。後は現地に行く行動力とモチベーション、最大限のコミットメントが大事である。当たり前だが、誰も行ったことがないのだから、登ってみたいとどうなるか分からないというわけだ。

2024年にキタラフとツイ2が教えてくれた大きな経験を糧に、これからも冒険的で創造的な、人が成し得たことのない大きなアルパインクライミングのラインを見つけ出し、自分が知らない世界を広げていきたい。



岩手県山岳・スポーツクライミング協会 自然保護委員会SDGsな活動

岩手県を代表する山として岩手山(2,038m)がごさいます。県などがつくる岩手山火山防災協議会の幹事会による噴火警戒レベル2(火口周辺規制)への引き上げに伴い、昨年10月から入山規制が続いております。本来であれば、岩手山の避難小屋管理や自然保護活動のパトロールや登山道整備を行うのですが実施出来ない状態です。

今回は盛岡市から委託を受けている登山道整備の活動を一部紹介させていただきます。

登山普及部では、盛岡の近郊にあるブナが美しい里山の箱ヶ森(865.5m)の登山道整備を実施しております。6、8、10月と3回の整備を計画し、登山道の下草と笹の刈り払い不要枝と倒木の撤去を実施、登山者が歩きやすく安全に登山できる道を目指して活動しております。登山口から杉林を登り尾根に沿ってブナ林を往くと獅子頭が奉納された平で広い山頂に至ります。信仰の山として登られており、岩手山・姫神山・早池峰山などはもちろん、縦走コースが続く南昌山山魂、山麓の猪去地区や盛岡から紫波郡内などの眺望が広がる良い里山です。

地元の方が管理していた里山も、作業する方の高齢

化に伴い、入山する回数も減り登山道も管理ができなくなってきました。各地域の里山も同じようなことが多くなっていると思います。

岩手山については、来年7月1日に規制を一部緩和する方向で安全対策の協議に入りました。警戒レベルの引き上げから約1年間にわたる観測結果から、レベルの引き下げには至らないものの火山活動の鈍化傾向が見られ、特に山の東側は落ち着いた状況になっていると考えられるとのこと。東側登山口4コースを入山可能とする予定で、雫石町の御神坂・滝沢市の馬返し・八幡平市の焼走り・上坊の各登山口がその規制緩和対象となります。

活火山である以上、山全体の継続的な警戒は欠かさず、県や地元市町、气象台、専門家共引き続き連絡を密にして活動するとのことでした。

規制一部緩和の最終判断は来年の5、6月ごろ、岩手山火山防災協議会が行う見通しです。来年は7月1日の山開き以降、岩手山は大勢の登山者で賑わうことでしょう。私達登山普及部も登山道整備と避難小屋管理を実施して、待ちわびた大勢の登山者を迎える準備をして行きたいと思います。



(一般社団法人 岩手県山岳・スポーツクライミング協会 登山普及部副部長 赤澤 信一)

JMSCA

令和7年度 第9回
ハイブリッド開催定時理事会報告

日 時：令和7年11月13日(木)

13時～16時30分

場 所：JSOSビル3F会議室5及びZoom

出席者

【理事】町田幸男、廣川健太郎、畑中 渉(途中退席)、望月啓治、赤尾浩一、小田部拓、石井昭彦、吉田春彦、中橋沙羅、星 一男(第4号議案より参加)、石田英行、武田豊明、原 勇人、下村真一(第4号議案より参加)、蛭田伸一、野村善弥、古賀英年、前田善彦、安井博志、小高令子、

栗田季慎子、中島隆之、(欠席)平田伸也、奥井健吾、藤江理枝、(欠席)西原斗司男

理事出席者24名、欠席者2名

【監事】古屋寿隆、佐久間務

監事出席者2名

1. 開 会

2. 会長挨拶

10月下旬に全日本登山大会があり、各岳連の協力のもと成功裡に終えることができました。本日も議事が盛りだくさんですが、皆さんの積極的な参加と、効率的な議事運営にご協力をお願いします。

3. 会議成立状況報告

理事数 26名中24名出席

監事数 2名中2名出席

(定款第33条、定足数=14名(過半数以上))

4. 議長選出

会長が議長をつとめる(定款第32条)

5. 議事録署名人

会長及び監事(定款第34条)

6. 議 題

議案第1号 前回理事会議事録の承認について

すでに、内容の確認は完了しており以下のとおり承認された。

棄権0名 反対0名 賛成21名

議案第2号 スポーツクライミング公認大会の承認について

栗田理事が、公認競技会申請が提出されている「Master of B LoC 2025」について配布資料を基に説明し、異議なく承認された。

棄権0名 反対0名 賛成21名

議案第3号 日山協山岳共済会と

AUTHENTIC JAPAN株式会社(ココヘリ)との提携について

望月専務理事が、9月提示案からの修正内容、委員会での審議状況、顧問弁護士の確認について説明し異議なく承認された。

棄権0名 反対0名 賛成21名

議案第4号 SC「JMCSA次世代アスリート育成プロジェクト」事業協賛に関する契約書及び覚書について

望月専務理事及び小田部常務理事が、内容や委員会での審議状況等を説明し、異議なく承認された。

棄権0名 反対0名 賛成24名

議案第5号 第80回青森国スポ大会SC競技会実施要項案について

原理事が説明し、異議なく承認された。

棄権0名 反対0名 賛成24名

議案第6号 2026年新春懇談会の開催について

望月専務理事が説明し、日時、場所、実行委員会メンバー（望月実行委員長、小高副実行委員長、及び他委員）について異議なく承認された。

なお、SCトップ選手たちの海外強化合宿と日程が重なることから、例年実施のトップ選手に係る催しを今回は省き別途行うことを確認した。また、事務局の繁忙期とも重なることから本催しの準備等に理事が積極的に関わって頂きたい旨のお願いが赤尾事務局長からあった。

棄権0名 反対0名 賛成24名

議案第7号 JMCSA定例表彰及び日本山岳グランプリの取り扱いについて

望月専務理事が、定例表彰については例年どおりの内容で関係先へ通知すること、日本山岳グランプリについては11月末まで募集することを説明した。

なお、定例表彰について、規程の中に高体連に関する事項が欠落していることが指摘されたため、次回理事会までに規程を改定することとした。

以上の審議を踏まえ以下のように異議なく承認された。

棄権0名 反対0名 賛成23名

議案第8号 令和7年度第2次補正予算について

望月専務理事が、SC強化委員会で補正予算が11/14に提示されるのでそれを基に確定していく。12月に最終報告する旨伝達し異議なく承認された。

棄権0名 反対0名 賛成23名

議案第9号 2026～2030年度中期計画の策定について

望月専務理事が資料を基に策定までの流れや方向性について説明した。最初の作業として2025年12月末までに委員会毎の振り返りを行うこと、ビジョンなどを検討する会を別途設けること、今年度中の策定予定などを提案し、異議なく承認された。

棄権0名 反対0名 賛成23名

議案第10号 短期運転資金の確保に関する承認について

赤尾事務局長が、現状の資金繰り状況と、予算管理表を説明した後12月15日以降に、年度末に向けて政策金融機関から4,000万

円を借入することを提案し、異議なく承認された。

棄権0名 反対0名 賛成23名

7.報告

報告第1号 11月末時点の収支・キャッシュフローの状況について

赤尾事務局長が議案第10号でまとめて説明した。

報告第2号 後援名義承認申請への対応について(3件)

望月専務理事から、「令和7年度雪崩防災週間」、「2026年度 山の知識検定(第12回)」、「「国際山の日」2025 シンポジウム山と水 氷河と流域社会を考える」の3事業が、後援名義使用申請について、常務理事会で承認されたことを報告した。

報告第3号 公認夏山リーダーの資格認定について((一社)京都府山岳連盟)

望月専務理事から、①宮井 秀樹 ②加芝直志 の2名が常務理事会で承認されたことを報告した。

報告第4号 SCコーチ1専門科目検定合格の認定について(茨城県会場11名)

望月専務理事から、①赤須 喜一郎 ②飯田大斗 ③伊藤 嘉奈子 ④柿崎 未羽 ⑤柿島 桂代 ⑥小松崎 純一 ⑦佐竹 真之 ⑧佐藤 悠織 ⑨富岡 寿文 ⑩額賀 洋輔 ⑪福田 大の11名が常務理事会で承認されたことを報告した。

報告第5号 第19回SKIMO日本選手権 黒部・宇奈月温泉大会のISMF(国際山岳スキー連盟)公認申請について

小田部理事が、要項の説明と、当該認定で何ら追加負担がないこと、要件を満たしていることを説明し、ISMFに申請することを報告した。

報告第6号 (公社)日本オリエンテーリング協会からの委員推薦依頼について

望月専務理事が、(公社)日本オリエンテーリング協会から調査委員会への外部委員の推薦依頼があり、溝手弁護士、町田会長の2名を推薦することについて常務理事会で決定したことを報告した。

報告第7号 雪崩防災週間推進協議会の書面議決について

望月専務理事が、当協議会から書面議決の要請を受けていること、JMCSAが、雪崩防災週間推進協議会の構成委員であること、及び活動内容を紹介し、書面議決を進めることを報告した。

議案第8号 第74回日本スポーツ賞への推薦について

赤尾事務局長が、事前配布資料を基に説明し、昨年に引き続き安楽宙斗選手が推薦されていることを報告した。

報告第9号 令和7年度上半期中間監査報告と今後の対応について

望月専務理事が、配布資料を基に、会計士からの分析結果報告、上半期監事監査所見を紹介した。また、中間監査報告の指摘事項について、各専門部長に対応策のとりまとめを12月8日(月)までにすることを要請したことを報告した。

報告第10号 令和7年度上半期の活動概要について

望月専務理事が、配布資料を基に、説明した。今後、事前に配布し、各理事、委員長が目を通し、追記するように依頼した。

報告第11号 令和8年度当初予算書提出依頼について

望月専務理事が配布資料を基に各委員会委員長あて(含む事務局長)に、12月26日(金)までに提出するように依頼した文書を紹介した。

報告第12号 登山月報経費削減の経過報告について

赤尾事務局長が、現状の配布数(2,235部)と、今後行うこと(岳連への更なる減冊への協力依頼)について説明した。

報告第13号 国スポリード壁4ルート問題の対応について

原理事が、現状の状況報告を行った。11月28日(金)に三者会議を行う予定。

報告第14号 今後の役員派遣ほか渉外等について(11月後半～12月)

- ・11月15～16日 第4回リードフューチャーカップ(LFC2025) 愛媛県西条市
- ・11月22～24日 第49回山岳自然の集い 埼玉県小川町
- ・11月27日 (株)ゴールドウィン創立75周年記念式典
- ・12月20～21日 第16回全国高等学校選抜SC選手権大会 埼玉県加須市
- ・12月6日 日本山岳会創立120周年記念式典・祝賀会

8.その他

各委員会議事録について

googleドライブに作成した各部のフォルダ内に収納してください。(SC部は既に収納済みであり、その他の部は同様な対応をお願いします。)

令和7年11月13日 記録 赤尾浩一



寄贈図書

日本ヒマラヤ協会	「HIMALAYA」No.514	会報	トータル・オリンピック・レディス会	「TOLだより」第40号	会報
日本トレーニング指導者協会	「JATI EXPRESS」Vol.109	会報	(株)山と溪谷社	「山と溪谷」2025年12月号	情報誌
(株)日本運動員新聞社	「スポーツ産業新報」第2486号、第2487号	新聞	おいらく山岳会	「山行手帖」No.792	会報
(公財)健康・体力づくり事業財団	「健康づくり」No.571	会報	新潟県山岳協会	「新山協ニュース」第381号	会報
(一社)愛知県山岳・スポーツクライミング連盟	「愛知岳連ニュース」第458号	会報	東京野歩路会	山嶺 Vol.103 No.1149	会報
(公社)日本スポーツ協会	「Sport Japan」vol.81	会報			

JMSCA SDGs 推進基本方針

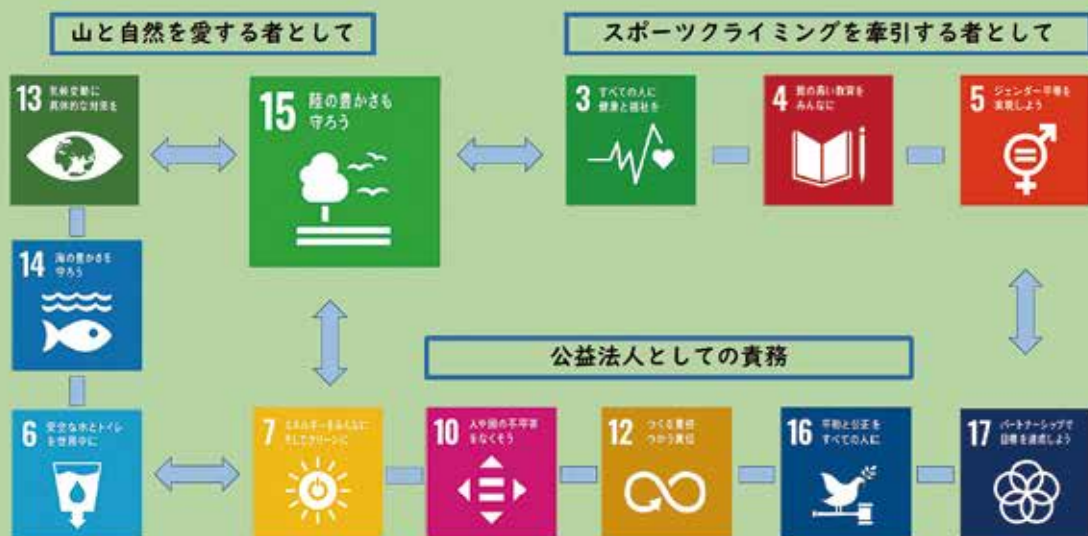
(公社) 日本山岳・スポーツクライミング協会は、多様な活動・取り組みを通じてSDGsの達成に寄与することをめざします。

実施原則

- ・ 普遍性 … 全ての場面で行動
- ・ 包摂性 … 人権の尊重、ジェンダーの平等
- ・ 参画性 … ステークホルダーの主体的な参加
- ・ 統合性 … 多様な目標との有機的な連動
- ・ 透明性 … 定期的なブラッシュアップと説明責任



JMSCAの活動と目標の関わり



「かすみちゃんのハイキング日記」



表紙のこぼ



大山頂上稜線から剣ヶ峰を見る

鳥取県伯耆大山(1709m)は、日本海に近い独立した山群であるため冬季には海から吹きつける北風が、厳しい寒気と大量の積雪をもたらします。

そのことから、標高2000mを超える山がない西日本の登山者にとって、本格的積雪期登山が体験できる貴重な存在となっています。入門から、急峻な北面のアルパインクライミングまで多彩なルート有しています。

(一社)岡山県山岳・SC連盟は、岡山大学から管理を委託された登山口の山小屋を補修・整備し加盟会員の山行や講習会等で活用しています。

岡山県山岳・スポーツクライミング連盟
山本 譲

編集後記

奥多摩でキャンプ泊をしてきました。紅葉が色づく好季節ですが、予報では最低気温3度。そこで今回は、ポータブルバッテリーと電気毛布という“文明の利器”を投入してみました。焚き火で体を温めて過ごす時間は、やっぱりキャンプの醍醐味。そのあとテントに潜り込むと、電気毛布のおかげでぬくぬくと快適で、思わず「もっと早く使っていれば…」と思ったほどです。一方で、季節はこれから冬本番。今年の積雪量は平年並みか、やや多めとの予想。昨冬はアイスクライミングに行けなかったのも、今年こそは楽しみたいと思っています。

(松本光顕)

登山月報 第681号

定 価 110円(送料別)
予約年間 3,000円(送料共)
(毎月1回15日発行)
発行日 令和7年12月15日
発行者 東京都新宿区霞ヶ丘町4番2号
Japan Sport Olympic Square 905
公益社団法人
日本山岳・スポーツクライミング協会
電 話 03-5843-1631
F A X 03-5843-1635

「山岳雑誌」山と人、時代をつなぐ 岳人 1月号

特別
編集

冬の山 2026

スタイル別 雪山の楽しみ方

モンベルのウェブサイト、全国のモンベルストアや書店にて販売中!

価格1,100円(税込)



▶年間購読が断然おトクです!

年間購読
通常特典

購読割引

送料無料

限定品プレゼント

さらに

モンベル
クラブ
会員さまには

モンベルポイント
5,000P プレゼント!

モンベルクラブ会員さまで現在購読中の方は、
次回継続時に5,000Pをプレゼントします。

年間購読特典

岳人オリジナル手ぬぐい



岳人の表紙絵を描く
中村みつを氏のイラストを使用!

限定
デザイン

岳人
カード

全国2,300ヵ所以上で
ご優待!

全国の温泉や山小屋など提携施設で
さまざまなご優待が受けられるカードです。



年間購読のお申し込みはこちらから! >>>

<https://www.gakujin.jp/>



全国の
モンベルストア
でも受付中!

お問い合わせ
モンベルポスト



0120-982-682 / TEL 06-6538-5797

※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

SDGsで、未来をつなぐ

三井住友海上は、安心と安全の提供を通じて、持続可能な社会の実現に取り組めます



SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



SDGs (Sustainable Development Goals) とは

2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に掲げられた包括的で持続可能な社会の構築を目指す「持続可能な開発目標」のことです。

持続可能な地球環境		安心して暮らせる社会		活力のある経済活動	
関連する主なSDGs	主な取組	関連する主なSDGs	主な取組	関連する主なSDGs	主な取組
 	<ul style="list-style-type: none"> 再生可能エネルギーの普及支援 自然災害リスクモデルにもとづくコンサルティング 	 	<ul style="list-style-type: none"> 健康づくりの支援 先進技術を活用した利便性の高いお客さま対応 	 	<ul style="list-style-type: none"> 次世代モビリティ社会への対応（自動運転車等） 災害に強いまちづくりの支援

立ちどまらない保険。

MS&AD

三井住友海上

三井住友海上は、レジリエントでサステナブルな社会※をめざします。

※外部環境にしなやかに対応する、持続可能な社会



日山協山岳共済会のご案内

**安全登山は登山者の努め、
山岳保険は義務。**

ご自身のために、ご家族のために。

日山協山岳共済会とは、

日山協山岳共済会とは公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会(JMSCA)とアライアンスを組み、安全登山の指導・普及を図り、山や自然が好きな人たちのための互助と自立を目指す仲間の集まりです。山岳共済会は、日本の山岳遭難・捜索保険の草分けで、5万人の会員を持つ最大級の山岳共済です。年齢・既往症に関係なくどなたでも入会できます。

2024年 山岳遭難の概況

警察庁生活安全局生活安全企画課
(2025年6月19日)

発生件数	2,946 件 (前年対比 180件減)
遭難者数	3,357 人 (前年対比 221人減)
死者・行方不明者	300 人 (前年対比 35人減)



2025年版

日山協山岳共済会のしおり

WEBからもお申込みいただけます (www.sangakukyousai.jp)

